

<牧会ミニ通信>No.27 2020・11・8

今まで多くのわたしたちは、「教会暦」に無関心でした。福音派の大半の教会は、戦後、来日した欧米の宣教師たちの影響を強く受けています。彼らの信仰のルーツといえば、伝統と格式のある欧州の国教会でした。しかし、そこから離脱したという背景があります。そうしたことから、宣教師の手がけた大半の教会は、「教会暦」をほとんど意識しません。教会も日本の暦に従ってきたのではないのでしょうか。

「暦」を持たない宗教はありません。イスラム教も仏教も「暦」があります。しかも、忠実に守られています。キリスト教にも「暦」があります。しかし、「クリスマス」といえば、えらく力を入れますが、「イースター」・「ペンテコステ」はどうでしょうか。後は、暦すら意識しないまま過ごします。

実は、教会のスタートは、「アドベント第一主日」から始まるのです。新年・元旦からではありません。

以前、新年を迎えた時、長崎の大浦天主堂を訪れたことがあります。祭壇にはクリスマスの飾りつけがそのままにしてありました。シスターに尋ねると、顕現節（1月6日）が終わるまで、取り外すことはありませんとのこと。多くの教会では、クリスマスが終わると、急ぎ飾り付けを取り外します。そして、年末と新年に心を向けます。こうした習慣をおかしなこととは思いませんでした。

「教会暦」を重んじるのは、カトリック教会、聖公会、ルーテル教会です。主日に読む聖書箇所は決まっています。講壇に掛ける布の色も、教会暦に従って変わります。降誕節・復活節は「白」、「アドベント」・「受難節」は「紫」、「聖霊降臨日」は「赤」、聖霊降臨後主日は「緑」です。会堂に入ると、掛けてある布の色により教会暦の意味を判別することができます。

キリストの教会は教会らしい年間のリズムを持たねばなりません。

周東のぞみキリスト教会の週報には、主日が具体的に明記されています。講壇に掛ける布も、それに従い変わります。日本の暦を覚えながらも、教会暦を自覚して歩む群れとなることが願われます。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城晋次